会　告

『日本医史学雑誌』の投稿規定では，これまで論文投稿にあたって紙媒体の原稿を中西印刷株式会社内の編集係に提出することを原則とし，電子媒体も添付するよう求めていました．論文投稿・審査・編集・管理の業務を円滑かつ効率的に行うために，論文原稿を電子媒体として扱うことが必要との判断から，論文投稿を電子媒体で提出していただくことを原則とするよう，投稿規定を改めることにいたしました．なお電子媒体での提出を望まれない方には，従来通り紙媒体を提出していただいて差し支えありません．投稿規定を充分参照され，特に4，5，6項を遵守の上，引き続き積極的な論文の投稿を各位にお願いいたします．

2014年1月10日

日本医史学雑誌編集委員会　委員長　坂井建雄

編集後記

日本医史学雑誌第60巻1号をお届けいたします．今号も原著4編を含め，広場，資料，消息など盛りだくさんの内容となっています．

さて，昨年より本誌編集委員に加えていただきました．至らぬ点も多いかと存じますが，皆様のご指導のもと，本誌をより充実したものにするため微力を尽くしてしていきたいと存じます．

本誌の編集に末席ながら携わって若干感じたことがあります．それは，寄せられる投稿の多彩さもさることながら，それを受け止める場としての本誌の鷹揚さ，あるいは一種の文人的古風さ，です．皆で持ち寄った作品を活字にする，という一昔前の文芸同人誌のような雰囲気とでもいいましょうか．ここで思い出されるのは，数年前の当学会月例会で三木栄先生に関する発表を拝聴した時のことです．ある先生から「関西では官職に属さずに開業のかたわら医史研究をする伝統があった」旨のご発言がありました．ひょっとすると“医史学”という分野には，歴史を対象とするというばかりでなく，江戸時代以来の文人的サークルといった側面があったのではないか，ひるがえって，本誌のこの“古風さ”には，雑誌というものが本来持っていた，いたずらに科学ぶらない持ち味があり，医学に限らず多様な分野の交錯する場としての積極的な意義があるのではないか，と愚考している次第です．

とはいえ，「変わらずに生き残る為には，変わらなければならない」（映画「山猫」（1963年，ルキーノ・ヴィスコンティ監督））．本誌も古くからの持ち味を活かしつつ変わらなければなりません．編集委員会でも，今後の本誌のあり方について毎回のように活発に議論が行われています．私自身もそのような場としての本誌を生かすために及ばずながら力になれれば，と自省を込めて考えております．

（逢見　憲一）